

フォード大統領一行の今回の極東訪問は、アメリカ大統領の史上初の訪日というばかりか、日・韓・ソ三カ国にわたるアメリカ大統領の最初の北東アジア歴訪という点で、きわめて意義深いものであった。なぜなら、朝鮮半島の新たな緊張、中ソ対立、日中・日ソ関係の微妙なバランス、ソ連の極東海洋戦略、シベリア開発問題などにみられるように、アジアの国際政治の焦点がいまや明らかに北東アジアへと移行しはじめた時点で、それが実現したからである。

● 外交時評

フォード来日以後と田中以後

中嶋領雄(東京外国語大学助教授)



ができないというような苦境のなかで、また外交的には、キッシンジャー外交に対しても、相変わらず世界を忙しく飛び回っているだけで、その成果が根をおろしてはいないのではないかという懐疑が、このところ出はじめていただけに、今回の歴訪には真剣であった。ただ、大統領一行の歴史的訪日が、田中退陣直前の日米首脳会議となってしまったタイミングの悪さは、いかんともしがたかった。

結局、資源・エネルギー外交からむ産油国

今回のフォード来日は、ニクソン・キッシンジャー外交によって結果的には軽視されつつづけてきた日本の重要性を、アメリカが再認識し、資源・エネルギー危機以来の「先進工業民主主義国」の協調の必要性を深く確認し合ったという意味において、日米友好の象徴的儀式以上の大きな意義をそこに見いだすことができる。

◆ —  
 出発したばかりのフォード政権の側にとっても、さきの中間選挙に示された民主党の躍進、ロックフェラー氏を副大統領に就任させること

政策では、日米間になお問題が残されたし、わが国が推進しようとしている汎太平洋外交に対し、アメリカ側がさしたる関心を示さなかったことも一つの問題点であろう。

ところで、ブランド政権、ニクソン政権につづく田中内閣の崩壊によって、七〇年代初頭、東方外交、米中接近、日中復交と、華やかな頂上を「緊張緩和」を旗印に遂行してきた首脳がいずれも、内政上のスキャンダルによって消え去ることになったのは、やはり衝撃的な教訓である。わが国の場合、本年になってからの外交

は、一連の汎太平洋外交をはじめ、きわめて多角的な外交ネットワークの形成を目指しはじめたばかりである。そのこと自体は、今日の国際関係の流動に見合ったものであるだけに、わが国の世界に占める責任の大きさからしても、後継内閣は今後も、そのような多角的な外交関係の形成とその地固めにさらに努めるべきであろう。ただそこで重要な問題は、新しい外交ネットワークの形成に当たって、近隣諸国との関係の安定化をまず前提にすべきことであり、この点では、台湾、韓国を含め、このところ反日論の高まっているアジア周辺諸国との関係改善に早急に着手しなければならない。

◆ —  
 最後に、ラロック証言以来の安全保障問題に言及するならば、今日のような激動の時代において、われわれはいまこそ平和と安全の相対性についての認識を深めなければならないと思う。今日の世界の現実において、平和と安全は絶対的な価値基準の問題ではなく、あくまでも国と国ないしは国際間の、相対的な状態を意味するものであることについての認識が、わが国の場合特殊に希薄であり、平和と安全がもっぱら絶対的な価値観との距離においてのみ考えられすぎはしないだろうか。それだけに、平和と安全の相対性についての認識を深めない限り、田中以後の日本外交が、世界の平和と安全に貢献する道は広がらないように思う。

外交